教育図書館収蔵の明治期習字教科書の研究(1)

－『啓蒙手習之文』の場合－

鈴木　慶子*　大森アユミ**　江草　由佳***

（平成24年10月31日受理）

Study of the Meiji period Shuji textbook of the education library store(1)
－In the case of “ Keimoutenarainohumi ” －

Keiko SUZUKI*　Ayumi OMORI**　Yuka EGUSA***

（Received October 31，2012）

１．はじめに

教科教育を志す者にとって教科書研究は必須である。しかしながら，特に明治期に関しては，その研究を進めることがきわめて困難な状況である。というのは，明治期の教科書類は，離散分散しているものが多く，図書館に収蔵されているものでも，汚れ，傷みや欠損が多く，厳しく閲覧複写が制限されている。しかも，印影を集大成した研究成果も乏しく，当該分野での研究進展の障壁となっている。

このような中で，国立教育政策研究所教育研究情報センター教育図書館（以降，教育図書館と呼ぶ）の教科書閲覧システムは，習字教科書（約100件）の画像情報（表紙，本文，奥付）を公開しており，一筋の光である。ただし残念なことに，釈文情報（文字列データ）が付加されていない，それが加わることで，知識情報源としての質は飛躍的に向上し，教科書研究の基盤も格段に進展する。

そこで，長崎大学の大森，鈴木は，国立教育政策研究所教育研究情報センター江草の協力を得て，教科書閲覧システムに収載されている習字教科書の翻刻を行い，教科書閲覧システムへの釈文情報付加の準備を進めている。

本研究では，手はじめに，東書文庫収蔵の同時期発行同名本を抽出して，各本の系統を調査し，本文校合を行いそれらの異同を明らかにする。そのことを通して，教育研究情報を整備していくことの必要性を提起することとする。

２．教科書閲覧システムへ釈文情報付加をする意義

教育図書館に収蔵されている習字教科書約100件は，すべて，著作権が消滅した国定期

*長崎大学教育学部　**長崎大学教育学部非常勤講師
***国立教育政策研究所教育研究情報センター

以前の初等教育段階の教科書である。著作権が消滅しているので，教育図書館では，画像情報を公開している。それに，釈文情報が加わることにより，習字教科書を対象としたり，媒介としたりする各分野の研究は，飛躍的に発展するであろう。

国定期以前の習字教科書の大半は，それが使用される地方で執筆編集され，発行されている。以降の時代における中央(東京)での執筆編集及び発行のものに比較して，きわめて強く，地方の特色が現れている。また，習字教科書は，手習いのためのいわゆる手本（字形や書式の見本）が収載されているのだが，それに止まらず，手本テキストには総合的な生活教育の内容が含まれている。したがって，一般的に考えて，手本テキストには，当時の，当該地方が求めた学力観が埋蔵されていると考えることができる。

本研究で取り上げる『啓蒙手習之文』は，学制発布とほぼ同時期に発行された文字教科書で，以降の習字教科書に多大な影響を与えたとされる。しかしながら，その影響に関する子細は明らかにされていない。というのも，上記で述べたように，研究基盤が整備されておらず，個人的単発的な研究に止まってしまうからである。つまり，点点としている研究情報を整備することが，当該分野における喫緊の課題である。

本研究では，試みに，『啓蒙手習之文』を収蔵する東書文庫と教育図書館とをつなぐとどのような地平が見えてくるのかについて探りながら，点をつなぐ意義について考えてみることとする。

３．本研究における方法

教育研究情報の整備のために，本研究では，下記の方法を取った。

①教育図書館蔵と東書文庫蔵とにおける共通本を列挙する。

理由；東書文庫収蔵の明治期習字教科書には，DBSHC(注１)によって釈文がある程度整えられているので，それを手がかりにすると，教育図書館本の釈文起こしを行いやすい。

②教育図書館本の釈文起こしを行う。

③教育図書館本と東書文庫本との本文校合を行う。

④教育図書館本と東書文庫本の活字化本等，関連資料及び関連事項を調査する。

上記①の調査の結果，共通本は14件であった。それを東書文庫の目録（発行年順）に沿って列挙したのが【表１】である。

注１　鈴木らは，平成17年度科研費（研究成果公開促進費－ＤＢ部門－）の助成を受け，「規範的手書き文字による教科書教材データベース（略称：ＤＢＳＨＣ，代表：久米公)」を構築した。ＤＢＳＨＣは，東書文庫が所蔵している明治検定期の習字教科書約600冊を対象にして書誌情報，及び全頁（表紙，本文，奥付）の画像情報，釈文情報（文字列データ）を格納し，各種検索機能を備えている。ただし，残念なことに，公開に関しては，東書文庫の見解によって，現在は保留となっている。

【表１】　教育図書館蔵と東書文庫蔵とにおける共通本

№	書　　名	手本書者	編　著　者	発　行　者	発　行　年	
					教　図	東　書
1	啓蒙手習之文	内田晋斎	福沢諭吉	慶応義塾大学	明治6	明治4
2	童蒙　筆づかひ	荻田長三	不　明	積玉圃	明治6	明治4
3	習字初歩	不　明	不　明	三浦源助	明治5	明治5
4	続習字初歩	伊藤桂洲	伊藤桂洲	丸屋正五郎	明治6	明治6
5	習字はじめ	村田海石	松川半山著並画	群玉堂	明治6	明治6
6	習字の近道	巻菱潭	不　明	河内屋喜兵衛	明治6	明治6
7	習字必用	荻田篠市	不　明	大野木市兵衛	明治5-6	明治6
8	小学習字本	村田海石	不　明	不　明	明治5-8	明治8
9	単語楷行書	村田海石	生駒章	大阪府学務課	明治8	明治8
10	新撰習字帖	村田浩蔵	太田謹	岐阜県師範学校	明治10	明治10
11	小学習字 十干十二支天地文 苗字尽	巻菱潭	森小三郎	聚成堂	明治14	明治14
12	小学中等習字本	村田海石	和田鋭夫	熊谷幸介	明治17	明治15
13	新定小学習字帖	村田海石	林吾一	原亮三郎	明治20	明治20
14	尋常科用小学習字本	村田海石	西完二	細謹舎	明治20	明治20

４．情報活用の事例　－『啓蒙手習之文』の場合－

本章では，【表１】のうち№１の『啓蒙手習之文』を対象にして，書写書道教育研究の立場で，教育図書館収蔵本に釈文情報を整備していくことで可能となることを検討していくこととする。

１）『啓蒙手習之文』の概要

『啓蒙手習之文』は，福沢が，文字学習のテキストとして著したものである。現在の書写教科書の原点だと評する者もある(安藤隆弘)。

『啓蒙手習之文』の章立ては，【表２】の通りである。内容及び実技学習の程度は，上巻は児童の習字学習本の程度として適当であるが，上巻の「天地の文」と下巻はかなり高

【表２】

上巻　章立て	字　大
平仮名いろは	４字／１丁
片仮名イロハ	５１字／１丁
漢数字	６字／１丁
十干	６字／１丁
十二支	６字／１丁
大日本国尽	５～６字／１丁
天地の文	６～８字／１丁

下巻　章立て	字　大
地球の文	１５字／１丁
窮理問答の文	３１～５３字／１丁
執行相談の文	１０７～１１５字／１丁
同　返事	２５～１２５字／１丁
洋学の科目	活字　(97～128字／１丁)

度である。

『啓蒙手習之文』には，【資料１】【図２】に引用したように，福沢諭吉の手習いの思想ともいうべき記述が見られる。福沢の文字学習に関する理念が反映されており，国語学的にも注目されている。

福沢の手習いの思想というのは，端的に言えば，文字の形を習うだけでなく，意味を理解することを併行して行うべきだとするものである。そのためには，表記も手本の字様もシンプルにすべきと考えた。その具現化が，『啓蒙手習之文』である。

【資料１】『啓蒙手習之文』序　　（原文縦書き）

願わくば五，六歳の童児，其字を習ふの傍に文の義を解し，諸学入門の道を易くすることあらば，此の冊子も亦手習師匠の一助にて，世教万分の一に益あらん乎，社中の幸甚のみ。

２）文字書者・内田晋斎について

福沢が，内田を選んだのは意図的であり，文字の質にこだわった結果であった。そのことについては，以下(3)で触れる。『啓蒙手習之文』上下巻とも，文字書者は内田晋斎(嘉一)である。

（１）内田の経歴

本名は嘉一。号を晉斎。他に方斎。現千葉県茂原市（上総長柄郡真名村）出身。嘉永元年（1848年）～明治32年（1899年）。慶応４年（1868年４月15日21歳）に慶應義塾に入塾。当時，慶応義塾は学生を教育するほか，小学校の教科書も多数出版しており，それら教科書中読物兼習字用のものは，おおむね内田が揮毫した。福澤は内田の書家としての能力を認め信頼していたらしく，卒業後，「啓蒙手習之文」をはじめ，福沢諭吉初期の著訳書の版下を多く書いた。また，明治初年に文部省に出仕して，同省出版の習字教科書の類を揮毫した。明治４年に辞典「浅解英和辞林」。内田自身の著書としては明治５年『窮理捷径十二月帖』という書簡文の文例と習字手本とを兼ねたものを刊行している。

（２）「かなのくわい」を主宰

当時の一流国学者群と交流があり，ローマ字論の勃興に対抗して，明治16年（1883年36歳）に「かなのくわい」を結成し，漢字を廃して，全てを平仮名表記することを主張した。

（３）文字書者に選ばれた経緯

福沢は，いろいろな書家に依頼したが，意にかなう者がおらず，内田に依頼した。その経緯が，【資料２】に記されている。つまり，福沢が習字の手本に求めたものは「分明」「シャレないもの」「子供に分かる」ものであり，内田の書風が福沢の理想であったことが文面より読取れる。福沢は，明治４年２月13日付けで，同20日に書き上げてほしいとの依頼をした。さらに，同23日付け手紙【資料３】で催促を行っている。

なお，福沢は，明治５年に内田が編纂した『窮理捷径十二月帖』に与えた序文で，この書を『啓蒙手習之文』と併用すれば「始て全壁を成して，啓蒙の為めに一層の裨益を致し，

世教の助ともならむ歟」と絶賛している(注2)。

【資料２】『福澤諭吉書簡集』第１巻 p199～200 （原文縦書き）

春暖相催候処御清安奉賀候。陳ば別紙一冊手習之文草稿出来候に付，当時御繁用の処恐入候得共，版下夕会相願度，実は先日より書家を求め手本を検査いたし候得共，各々申分有之，何分にも意に適し申さず，不得止相願候義，幾重にも宜敷奉願候。
一，製本は上下二冊に仕立候積り，表題も奉願候。
一，文字は都て分明を貴ぶ。可相成丈けシャレのなきよふ，子供に分り候ふ奉願候。
一，字くばりは都て草稿通り。
一，此草稿未だ出版向にさし出不申候間，御秘可被下，版下夕出来の上，この草稿を以て出版相願の積りに存候。
一，当時御用繁は存居候得共，何卒御繰合一日も早く出来候ふ奉願候。当月二十日貴宅まで御尋申上候積，其節御出来相成居候はば誠に難有存候。
此段願用申上度，余は大友君より御聞取可被下候。頓首々々。
二月十三日
福澤
内田様

【資料３】『福澤諭吉書簡集』第１巻 p200 （原文縦書き）

昨朝は参堂，御多様の処御妨いたし，奉恐縮。
系紙さし上候間宜敷奉願候。可相成は一日も早き方よろしく，少しは御不出来にても私方は不苦，此段要用のみ，早々頓首。
二月二十三日

３）『啓蒙手習之文』の初版と増補版との比較

（１）東書文庫本(『啓蒙手習之文』初版)と教育図書館本(『啓蒙手習之文』増補版)との形式的な違い

慶應義塾大学本，東書文庫本，教育図書館本の三種類をもとに，『啓蒙手習之文』各本の形式的な違いをまとめたものが【表３】である。また，東書文庫本と教育図書館本の扉の図版が【図１】である。(注3)

注２　国立国会図書館近代デジタルライブラリーで閲覧した。
注３　「東書文庫本」と示したものは全て東書文庫収蔵のものであり，「教育図書館本」と示したものは国立教育政策研究所教育研究情報センター教育図書館収蔵のものである。

【表３】『啓蒙手習之文』　各本の形式的な違い

		慶應義塾大学本	東書文庫本	教育図書館本
表　紙		網目地紋の濃藍色	黒白斜め縞に「慶応義塾蔵版」の６字を散らし書きに白字で出している	黒白縦縞に「慶応義塾蔵版」の６字を散らし書きに白字で出したものに銀粉刷きつけ
刊行年月		明治四年辛未初夏	明治四年辛未初夏	明治六年五月
丁頁	上巻	序；２丁(p3～6) 目録；１丁(p7～8) 本文；51丁(p9～109)	序；２丁(p3～6) 目録；１丁(p7～8) 本文；51丁(p9～109)	序；２丁(p3～6) 増補序；１丁(p9～10) 本文；54丁(p11～118)
	下巻	本文；35丁(p3～71) 奥付なし	本文；35丁(p3～71) 奥付なし	本文；38丁(p3～76) 奥付なし
題　箋		「啓蒙手習之文」	な　し	「増補啓蒙手習之文」
扉（ｐ２） 扉は，上巻のみ		筆の軸に 「明治四年辛未初夏」	筆の軸に 「明治四年辛未初夏」	筆の軸に 「明治六年五月」
		「慶応義塾出版」	「慶応義塾出版」	「再版増補訂正」
		啓蒙　手習の文	啓蒙　手習の文	啓蒙　手習の文
		墨の面に「尚古堂発兌」	墨の面に「尚古堂発兌」	墨の面に「福沢諭吉版」
		福澤諭吉編　㊞	福澤諭吉編　㊞	福澤諭吉編　㊞
㊞蔵版印		慶応義塾蔵版之印	（現時点では未確認）	慶応義塾蔵版之印　？
序文	冒頭	「啓蒙手習之文序」	「啓蒙手習之文序」	「旧版序」　字詰めを変えている。
	版心	「啓蒙手習之文」 「巻之一」「巻之二」	「啓蒙手習之文」 「巻之一」「巻之二」	「啓蒙手習之文」「巻之一」「巻之二」「旧版序」
	文末	「明治四年辛未三月」 「福澤諭吉誌」	「明治四年辛未三月」 「福澤諭吉誌」	「明治四年辛未三月」 「福澤諭吉誌」
増補序文				「増補啓蒙手習の文序」が一丁加わり，その末尾に「明治六年五月七夜」「福澤諭吉誌」がある。
備　考			書き込みあり（増補版に反映されている）	

慶應義塾大学本，東書文庫本，教育図書館本の各本の形式的な違い調査を通して，以下のことが推察できる。

① 慶應義塾大学本と東書文庫本の版木は同一である。

② 東書文庫本には書き込みあり，その内容が増補版である教育図書館本に反映されている。【図３】参照。

③ 教育図書館本(『啓蒙手習之文』増補版)と東書文庫本(『啓蒙手習之文』初版)，及び活字化本等との関係は，【表４】に示した通り。

【表４】教育図書館本と東書文庫本，及び活字化本等との関係

	初版　明治４年発行　内田晋斎手本書	増補版　明治６年発行　内田晋斎手本書
版本	慶應義塾大学本　　東書文庫本	教育図書館本
活字本など関連資料	デジタルで読む福沢諭吉 http://project.lib.keio.ac.jp/dg_kul/fukuzawa_about.html 慶応義塾大学図書館デジタルギャラリー	『福沢全集　第２巻』所収　福沢諭吉著 時事新報社刊　時事新報社編　1898年発行 （図書ID:1000637） 『福沢諭吉全集　第３巻』p3～20所収 慶応義塾編纂　岩波書店刊　慶應義塾著 1969年再版発行（図書ID:1421007） 『福沢諭吉選集　第２巻』p188～200所収 富田正文，土橋俊一編集　岩波書店刊 1989年（図書ID:1421686） なお，長崎大学附属図書館蔵調べ。

（２）東書文庫本（『啓蒙手習之文』初版）と教育図書館本（『啓蒙手習之文』増補版）との内容及び表記上の違い

東書文庫本（『啓蒙手習之文』初版）と教育図書館本（『啓蒙手習之文』増補版）の本文校合をとおして，以下のことがわかった。なお，資料Ⅰ・Ⅱには，下記①～⑥を集約するために行った東書文庫本（『啓蒙手習之文』初版）と教育図書館本（『啓蒙手習之文』増補版との本文校合の結果を報告する。

①内容に関して

・改正した理由をしるした「増補啓蒙手習之文序」の追加
・太陽暦を採用したことによる内容の改正〔「天地の文」〕　　【図３】参照
・地球の面に関する内容の改正〔「天地の文」〕　　【図４】参照

②主だった削除に関して

・「北海道十二ヶ国名」の振り仮名の削除

③文字の特徴に関して

初版本と増補版本の手書き文字の特徴に注目すると，起筆部分を中心とした太細の違いや漢字のくずし違いは全体に及んでいる。このことから，増補版は，ほぼ書き下ろしたものであると判断できる。ただし，「巻之ニ（下）」の「又ノ十六」左側から「十七」右側にかけての一丁分は，初版本の版木あるいは草稿を活用したものではないかと推察される。というのは，前後の部分では「漢字の書体を変え（楷書→行書など）」たり，「字母の異なる変体仮名を使用」したりというのが多数あるのに対し，この一丁分のみ，「ゆへ→ゆゑ」の一箇所だけが異なっているからである。また，頁の表記が，「十六」→「又ノ十六」→

「十七」となっていることからも，後に一丁分を追加したものと思われる。【図５】【図６】参照。

④その他

漢字表記から平仮名表記への変更（【表５】参照），仮名に関しては「変体仮名→平仮名」へ変更された割合が多い（【表６】【表７】【表８】参照），漢字使用に関する変更（【図７】参照）がみられた。【表６】【表７】【表８】に関しては，合計317箇所，仮名文字は29種に収束される。なお，今回は変更された点だけに注目したものであり，変更されていない点は調査していない。

上記④は，福沢が『啓蒙手習之文』を著した際の目的【資料４】にも通じるものであり，以降の習字教科書の起点ともされる考え方である。また，同時期に刊行された文字学習の理論書である『文字之教』（明治６年８月端書起草）には，【資料５】のようにあり，『啓蒙手習之文』(増補版)での変更部分と一致している。

【表５】

可シ→ベシ	左→ひたり（飛多り）	右→みき（三起）
西→にし（尓し）<２ケ所>	登り(里)→のほり（乃ほ利）	暗し→くらし（久らし）
集→あつめ（あ徒免）	僅→わつか（王徒可）	方→かた（可多）
住ふ→すまふ（春まふ）	多し→おほし（お本し）	堪へ忍ひ→たえしのひ(志乃ひ)
進め→すすめ（春ゝ免）	辯へ→わきまへ（王起まへ）	同し→おなし（お奈し）
民→たみ（堂三）	見え→みえ（三え）	影→かけ（可け）
偖→さて（佐て）・さて	挟み（三）→はさみ	挟み（三）→はさみ（者佐三）
圓く→まろく	覆ふ→おほふ（お本ふ）	愈→いよいよ（い与ゝ）
想ふ→おもふ	続く→つづく（徒〻く）	為り（里）→なり（那り）
其→その（そ乃）・その	定れ→さたむれ（佐多む連）	流る→なかる（那可る）
思へ→おもへ	見る→みる（三る）	慣る→なる（那る）
起る→おこる（於こる）	施し→ほどこし（本と古し）	迄→まて
時→とき（と幾）	云ひ→いひ	恐る→おそる

【表６】①変体仮名→平仮名　　（１４９/３１７）

東→教書　図	個数	東→教書　図	個数	東→教書　図	個数	東→教書　図	個数	東→教書　図	個数	東→教書　図	個数
以→い	3	越→を	13	能→の	8	安→あ	1	天→て	9	勢→せ	2
八→は	1	堂→た	1	乃→の	1	左→さ	1	氐→て	1	世→せ	1
者→は	1	多→た	1	之→の	29	幾→き	1	奈→な	4	李→り	3
尓→に	2	連→れ	3	満→ま	1	起→き	3	為→な	2	里→り	18
登→と	9	楚→そ	1	介→け	1	免→め	2	三→み	1	流→る	1
遍→へ	1	徒→つ	1								

【表７】②変体仮名→字母違いの変体仮名　（９７/３１７）

東→教 書　図	個 数	東→教 書　図	個 数	東→教 書　図	個 数	東→教 書　図	個 数	東→教 書　図	個 数	東→教 書　図	個 数
盤→八	12	二→尓	29	里→利	3	為→堂	1	能→乃	2	幾→起	3
者→八	1	尓→耳	4	里→梨	1	多→夕	1	之→乃	1	起→支	2
八→盤	11	尓→二	2	越→遠	1	奈→那	3	之→能	3	起→幾	1
者→盤	2	耳→二	1	越→ヲ	3	那→奈	1	具→久	1		
天→亭	1	耳→尓	3	須→春	2	為→那	2				

【表８】③平仮名→変体仮名　（７１/３１７）

東→教 書　図	個 数	東→教 書　図	個 数	東→教 書　図	個 数	東→教 書　図	個 数	東→教 書　図	個 数	東→教 書　図	個 数
は→盤	5	り→利	1	た→多	3	て→亭	1	き→幾	1	み→三	2
は→八	2	を→越	7	れ→連	5	て→而	1	き→起	6	し→シ	1
と→登	8	を→ヲ	1	な→那	4	て→氐	1	き→支	4	も→毛	5
と→ト	5	よ→与	1	の→乃	3	さ→佐	2	め→免	2		

【資料４】『啓蒙手習之文』序　（原文縦書き）

然るに従来，手習い師匠なる者をして端緒を開かしめなば，大いに世間の費冗を省き，教を普くするの源ともなるべし。然るに従来，手習師匠の教は，実学の切要なるに眼を着せず，唯冠婚喪祭(ママ)，探花観月の文，和歌唐詩等の外ならずして，方今文開の世に在ては或いは迂遠の譏りを免れず。由て私に社中と謀り，いろは四十七文字より国尽を始めとし，傍ら西洋諸書を意訳して通俗の文章を作り，上梓して習字本の手本を供せり。

【資料５】『文字之教』端書（『福沢諭吉選集』第２巻　p218）　（原文縦書き）

［前　略］

一，時節を待つとて，唯手を空ふして待つ可きにも非ざれば，今より次第に漢字を廃するの用意専一なる可し。文章を書くに，むつかしき漢字をば成る丈け用ひざるやう心掛ることなり。

［中　略］

一　医者，石屋などの字は，仮名を用るよりも漢字の方，便利なれども，上る，登る，昇る，攀るなどの字を一々書き分くるは甚だ面倒なり。猿が木に攀るも，人が山に登るも，日本の言葉にては，ノボルと云ふゆへ，漢字を用るよりも假名を用いる方，便利なり。都て働く言葉には成丈け仮名を用ゆ可し。

［後　略］

５．成果と展望

１）『啓蒙手習之文』の調査から

（１）『啓蒙手習之文』初版による，文字学習の階梯化，及び手本字様の簡素化

江戸時代からの寺子屋での文字学習の批判に基づいて，福沢は，『啓蒙手習之文』を著した。それは，子ども用教科書として，手習いの思想を具現化したものとなっている。手本書者にも，その思想を体現できる内田晋斎を起用している。

（２）『啓蒙手習之文』増補による，手習いの思想の更なる具現化

増補の箇所をみると，暦法や自然科学研究による変更の外は，ほとんどが表記上の変更である。そのことは，文字学習をよりいっそう簡素化することをねらっている。すなわち，福沢の手習いの思想をさらに具現化したものである。

（３）『文字之教』における文字学習の理論化

『文字之教』(明治６年８月起草)の端書きの２つの項目には，『啓蒙手習之文』増補で具現化されている要件が整理されている。このことから，起草の時間関係を考慮しても，『啓蒙手習之文』での，いわば実験が，『文字之教』執筆の推進力になったことが予想できる。また，福沢は，『文字之教』端書きの第１項に，漢字を廃する考え方が非現実的である，性急であることを記述している。強引に『啓蒙手習之文』の手本を書かせた内田晋斎が漢字全廃を主張する「かなのくわい」の会のトップであったことを考えると，その後の文字学習書上梓への影響を思わずにはいられない。

２）教育研究情報の整備に関して

個人的及び単発的な研究のほかに，教科教育学としての研究基盤を整えるためには，組織的かつ計画的な研究が必要であり,経営ともいうべき策定がなければならないと考える。

そのなかでも，公共性が高い先行文献に関する書誌情報の整備，とりわけ明治期の関連文献の翻刻及び通釈は，学会を挙げて取り組む事業であろう。

現在及び将来の文字学習，並びに書写学習を理論的に構築する上（国語国字問題との関連，教科再編との関係，言語学習との関連，書道とも関係，等）で，明治期の関連文献は必須古典であり，示唆に富んだ内容が埋蔵されていると考える。

６．おわりに

本研究における役割分担は，大森が「全体調整及び統括，『啓蒙手習之文』本文校合及び分析考察」，鈴木が「東書文庫収蔵本の調査，『啓蒙手習之文』分析考察，書写書道教育の観点からの考察」，江草が「教育図書館収蔵本の調査，情報学の観点からの考察」を行った。『啓蒙手習之文』分析考察は，大森と鈴木が共同で行った。

本稿の参考文献を調査する過程で，多くの方の協力をいただいた。末尾ではあるが，長崎大学図書館の松田氏，浦氏，及び教育学部４年生（当時）学生の久田さんに深くお礼申し上げる。

【図１】東書文庫本と教育図書館本の扉

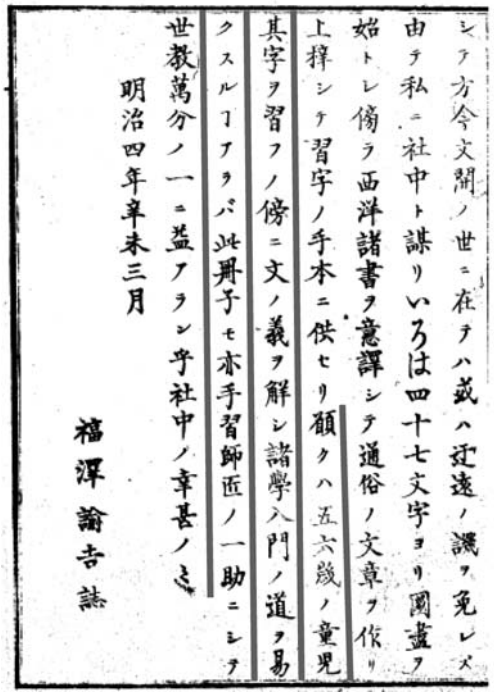
東書文庫本の扉



教育図書館本の扉



【図２】東書文庫本　「啓蒙手習之文」序より



シテ方今文開ノ世ニ在テハ或ハ迂遠ノ譏ヲ免レメ
由テ私ニ社中ト謀リいろは四十七文字ヨリ圖畫ヲ
始トレ傍ラ西洋諸書ヲ意譯シテ通俗ノ文章ヲ作リ
上揮シテ習字ノ手本ニ供セリ顧クハ五六歳ノ童兒
其字ヲ習フノ傍ニ文ノ義ヲ解シ諸學入門ノ道ヲ易
クスルニアラバ此冊子モ亦手習師匠ノ一助ニシテ
世教萬分ノ一ニ益アラン乎社中ノ幸甚ノミ

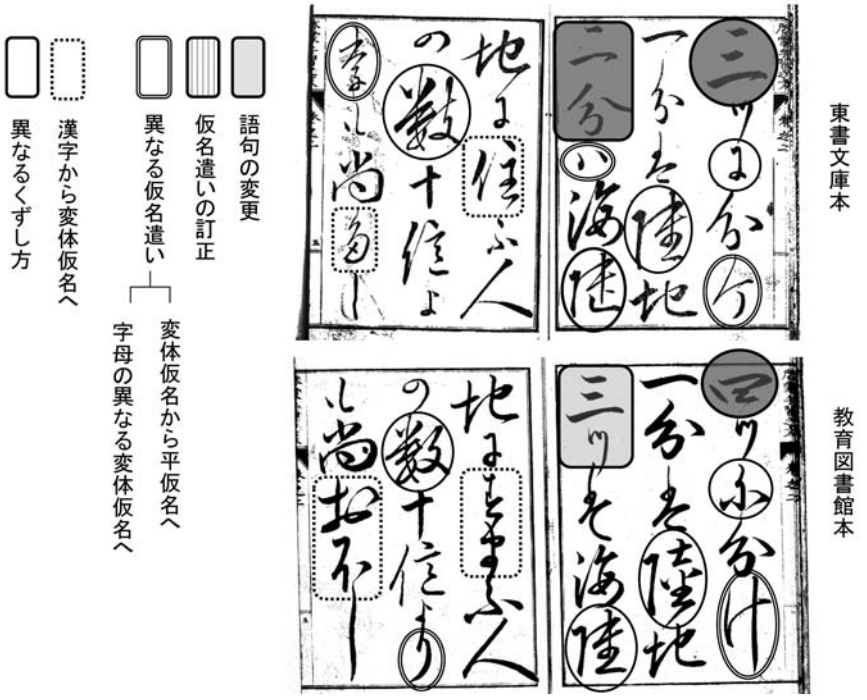
明治四年辛未三月

福澤諭吉誌

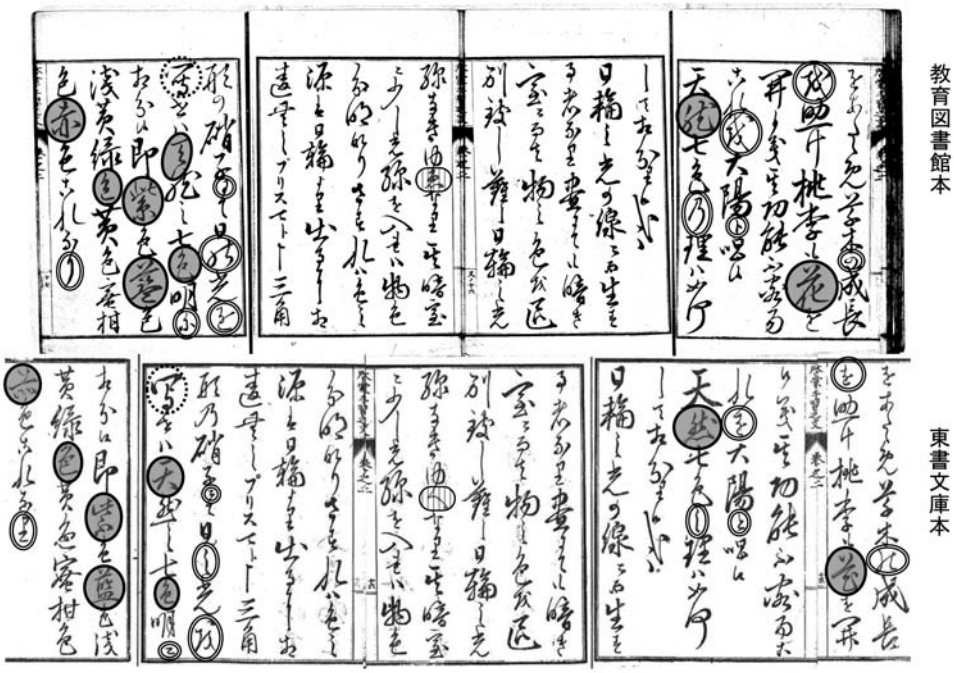
【図３】東書文庫本での増補版に反映された書き込み



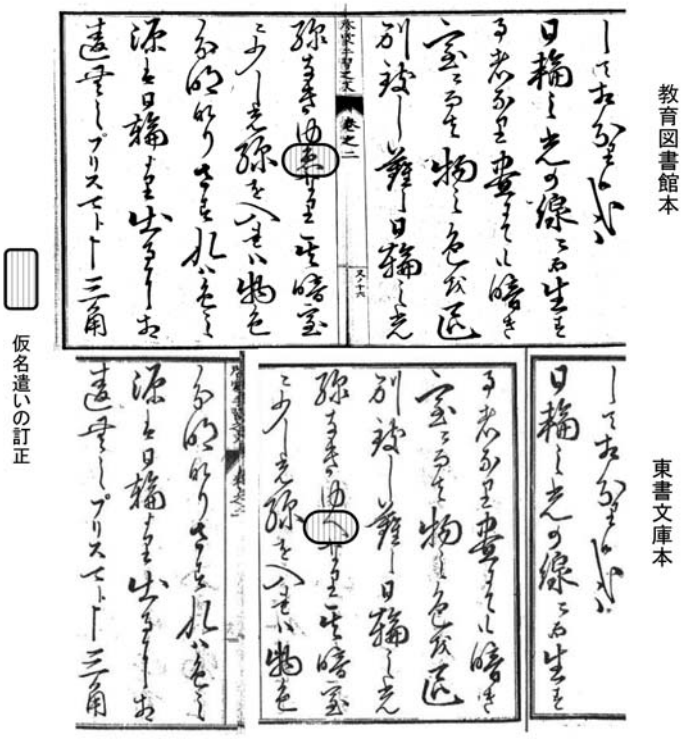
【図４】地球の面に関する内容の改正〔「天地の文」〕



【図５】東書文庫本と教育図書館本の比較



【図６】仮名遣いの訂正



【図７】漢字使用に関する変更

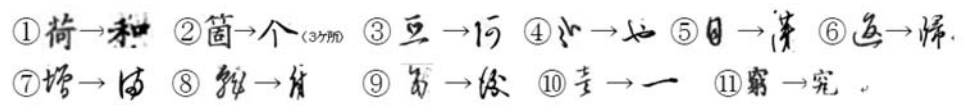
異体字の変更：17文字40ヶ所



異なる筆写体への変更



異なる漢字の使用：12文字15ヶ所



【主要参考文献】
・「千葉縣教育史　第二巻」千葉県教育委員会（ｐ1081－1082）1937年５月
・「福沢諭吉とその門下書誌」丸山信『慶応通信』（ｐ86－87）1970年５月
・『茂原市史』茂原市史編さん委員会（ｐ520－521）1976年８月
・『福沢諭吉選集』第２巻　富田正文　岩波書店（p188－189）（p218－220）1981年２月
・『第11巻　漢字と国語問題』佐藤喜代治編　明治書院　1989年６月
・「福澤諭吉と内田晋斎」安藤隆弘『川村学園女子大学研究紀要』第５巻第１号（ｐ157－181）1994年３月
・「福澤諭吉と習字教科書－慶應義塾出版局にて摺られた版木の存在を中心として－」広瀬裕之『書写書道教育研究』第９号（ｐ21－31）1995年３月
・「福澤諭吉書簡集　第一巻」慶応義塾　岩波書店（ｐ199－200）2001年１月